

## 我国初期觀音信仰の形成過程

成 田 俊 治

### 一

日本仏教信仰史を見る時、現世利益を主とするものと、未来往生を願う未来信仰の二つに大別出来る事は否定出来ない事実である。しかしこの二方向が全然別個の形として存在するものではなく、現世的なものと未来的なものとが両者相まつて信仰史を形造つていると云える。初期に於ける信仰が、現世を肯定し、しかも未来をも認めると云う立場から、中世に於ける一応現世を否定し未来のみ認めるといふ立場に展開して行く過程そのものに信仰の歴史があるわけであり、それは他面日本人の精神の成長を意味するものである。

さて、仏教伝来当初の宗教意識は、生活に直接関連のあるもの、自己の生活の上に関係あるものを神としていた為、多神教的な色彩を持つており、生産関係、自然現象、天変地異をその対象としていた。そして神を意識する場合、対象となるそのものの自体を直ちに神と考える場合と、その対象となるものの中に内在し働くspiritualなものを意識する場合との両面の宗教意識を持つていたのである。こうした自己の生活の場に神を意識し、対象物そのもの或はその内に働くspiritualなものを意識すると云う宗教意識を持つ古代人が、ここに新しい宗教、深遠な仏教を受容する場合、未だ未来とか、将来とか云う無形の世界、心の世界と云う事は全く関心

外であつたに違いない。それよりも仏教のもつ現世利益的なものへの願望、即ち生活を取りまく諸制約に悩まされ、天変地異に驚かされ、疫病に、難産に苦しんだあげく、除災、疾病平癒或は受胎安産と云う生活に於ける福德利益をその目的とする願望しか持たなかつたのである。そして仏教それ自体は、現世と云う限界に於て始めて当時の人々の前に浮び上つて来たのである。ここに仏教の現世利益信仰が仏教受容の一面として取上げられるわけである。本稿ではその中特に観音信仰についてその信仰が形成されて行く過程を考えてみたいと思う。

## 二

観音信仰の形成が何時からかと云う明確な解答を得る事は出来ない。何故ならば伝来初期の信仰が、その対象が釈迦、薬師、或は観音であるを問わず、そこには何等個別的な意義を認める事は出来ないからである。釈迦像であれ、又薬師、彌勒、観音の像であれ、全て画一的に人生の最大苦である疾病の平癒、除災招福を祈念し、或は追善供養する為のものであつた。かの法隆寺釈迦如来及両脇侍像の銘が除病思想を現わし、又同じく法隆寺の猷納御物の如意輪観音像銘は追善供養を現わしているのをみても明らかである。しかしながら時代の経過と共に仏教の教理の理解が深められて行くに従い、素朴な信仰に止つているのみではなく、そこに精神的に或る程度成長した人間の意志を通してそれぞれの仏像が作られ信仰されるようになったのである。

しかし先に述べた如く仏教に対する信仰が画一的であつたにせよ、数多くの観音像が作られている事は一応注目しなければならない。では造像の面からそれが観音信仰とは云えないまでも、飛鳥、白鳳を通じて観音像の造像を取り上げてみよう。

先ず聖徳太子の救世の誓願より自らをモデルとして造られたと云う救世観音が観音像として我国最古のものと云われており、天平宝字五年（A D 七六一）の法隆寺資財帳に

「上宮王等身観世音菩薩木像壹軀 金箔押」

とあるのは此の像を指しているものである。

銘あるものとして

「大和国斑鳩寺金銅二臂観音座跌

辛亥年（五九一）七月十日記笠評君名大古臣辛丑日□去辰時故兒在布奈太利古臣又伯在建古

臣二人志願」

とある。笠評君名は大古の臣という、辛亥の年七月十日に逝去した、そこでその兒の布奈利古の臣と、伯父にあたる建古の臣との二人が、辛丑の日に願主となり此の像を造立したと云う意味で、辛亥の年は崇峻天皇四年か、孝徳天皇白雉二年かは問題とされているが、大体白雉二年とされている。もし崇峻天皇四年とするならば、記録を有する最古のものと云わねばならない。又法隆寺献納御物の如意輪観音像は

「歳次丙寅正月十八日記高屋

大夫為分韓婦夫人名阿麻古願南無頂礼作奏也」

の銘あり、丙寅の年は推古天皇十四年（六〇六）であり、その年の製作である。

又河内観心寺観世音菩薩造像記には、

「戊午年十二月為命過名伊之沙古而其妻汗麻尾古敬造彌陀仏像以此功德願過往其夫及以七世父母生生世世恒生浄土及至法界衆生悉同此願（耳）」

とあり戊午の年は斉明戊午四年（六五八）の事である。又出雲鰲淵寺觀音菩薩像に

「壬辰年五月出雲国若倭部臣德太理為父母奉作菩薩」

の銘があり、持統壬辰六年（六九二）の作である。更に法隆寺觀音菩薩像にも

「甲午年三月十八日鰲大寺德聰法師片罡王寺令弁法師飛鳥寺弁聰法師三僧所生父母報恩敬奉觀世音菩薩像依此小善根令得無生法忍乃至六道四生衆生俱成正覺」

の銘があつて、持統甲午八年（六九四）の像である。

以上現存する觀音像を年代順に挙げてみたのであるが、之等造像の共通する所は、その意図が七世父母の為の追善供養の爲のものであり、これを他の像の製作意図と比較してみると、例えば法隆寺猗納御物の中甲寅年三月廿六日の銘がある釈迦如来像光背には

「甲寅年三月廿六日第子王延孫奉現在父母敬造金銅釈迦像一軀願父母乘此功德現身安穩生生世世不經三塗遠離八難速生淨生淨土見仏聞法」

とあり、又同じく法隆寺釈迦如来光背銘にも

「戊子年十二月十五日朝風文將琴濟師懸燈為嗽加大臣誓願敬造仏像以此願力七世四恩六道四生俱成正覺」

とあつて、觀音像の造像意図と全く同一の意図のもとに造像しているのである。この事は、當時の造像の意図が何仏に限らず七世父母の追善供養の爲であり、或る特定の仏像を作ると云うより、造を作るその事が供養になり功德になると考えられていたからであろう。

次に既に挙げたもの以外に記録のみされているものとしては『日本書紀』卷之二十九、朱鳥元年（六八六）の条に、

「諸王臣等為天皇造觀音像則說觀世音經」

とあり、又同じく書紀卷之三十、持統天皇三年（六八九）の条にも、

「獻金銅阿彌陀像金銅觀世音菩薩像大勢至菩薩像各一軀綵錦綾」とあり、

又これが事実か口伝かは別として『扶桑略記』第三、推古天皇三年（五九五）乙卯春の条に

「土佐南海 夜有大光 其声如雷 經卅箇日 夏四月 着淡路島南岸 其大一匝 長八尺余

其香異薰 貢獻朝廷 島人不知 交薪多燒 太子奏曰 是曰 是為沈水香 此木名稱檀香木

生南天竺南海之岸 夏曰諸蛇相繞此木 冷故也 人以矢射 冬月蛇蟄 折而採之 其実鶏舌

其花丁子 其脂薰陸 沈水久者 為沈水香不久者為淺香 而今陸下興隆釈教 肇造仏造 故

釈梵感德 漂送此木 即有勅 令百濟工刻造檀像 作觀世音菩薩高数尺 安吉野比蘇寺 時

々放光」

とあり、勿論この像は現存しておらないが、『日本書紀』卷之二十二 推古天皇三年夏四月の条に

「三年夏四月沈水漂着於淡路島其大一匝嶋人不知沈水以交薪焼於竈其烟氣遠薰則異以獻之云云」

の記事によりて、この「扶桑略記」或は『聖德太子伝暦』卷上が

「即有勅 命百濟工刻造檀像 作觀音菩薩高数尺 安吉野比蘇寺時々放光」

と云う様に潤色したものであると思われる。以上仏教信仰の中觀音に関するものを造像の面からビックアップしたわけであるが、大体推古飛鳥時代に於ては、その存在を裏付ける確証がなかつた觀音像が、奈良前期即ち白鳳時代になつて多くの觀音像が作られた事は、勿論各仏像と

も共通した作製意図には違いないが、そこに何等かの観音に対する意識があつたのではなからうか。

さて、以上の如き造像の限りに於ては観音信仰の特殊性を見出す事は出来なかつたが、しかし観音に対する信仰が漸次形造られつつある事を見逃してはならない。信仰と云うものが、それが日本古来の固有信仰として伝承されたものは別として、外来の輸入された仏教の場合、その仏、菩薩の性質或は弘誓、功德を説く經典の輸入、理解、そしてそれ等經典の講經、誦誦等によりその信仰が普及高潮せられて行くと云う事は云う迄もない事である。この意味から観音に対する信仰が形造られつつあると云うその裏付けとなるものは、ひとえに法華經の輸入、その理解によるものである。特に聖德太子の仏教に対する理解、その興隆に意を注がれた事に注目される。

欽明天皇の御代に仏教が我国に伝来して以来、幾何もなく法華經の伝来があつた事は、その後約五十年を過ぎた推古天皇十四年（六〇六）に太子が法華經を講ぜられた記事を見出す事により当時既に法華經が伝来され、經典研究が行われていた事を意味するものである。『書紀』二十二、推古天皇十五年（六〇七）の条に、七月小野妹子を隋に遣わした記事があり、又『太子伝曆』上等にも妹子に命じて法華經を持ち歸らせたとあるが、一年前にその講經があつた事から、それは当時中国での諸学匠の法華經の注釈書の輸入を目的としたものではなかつたかと思われる。

次いで推古天皇二十二年（六一四）正月、太子は『法華經義疏』の製作を始められ、翌年四月に完成されている。

時代は下るが正倉院文書によれば、天平時代に『法華經義記』法雲『法華玄義』『法華玄贊』『法華文句』『摩訶止觀』智顗『法華義疏』『法華玄論』『法華統略』『法華遊意』吉藏等の講讀、注疏が、書寫読誦されているのを見ても、天平時代には既に法華經に対する研究が盛んに行われていた事が窺われるのである。

以上仏教伝来初期に於ける觀音に関するものを挙げたのであるが、當時に果して觀音に対する信仰として一つの纏つたものがあつたとは断定出来ない。何故ならば、觀音像の作製が、或は又法華經の講經、注疏等が觀音の特殊性を意識しての、觀音に対する信仰を形成せしめんが為のものであるとは云えないからである。太子の『法華經義疏』の作製が、觀音菩薩を意識してのものであつたと云う事は出来ない。むしろ太子自身、法華經は万善同歸の教として國民の文化向上を目的とされているのである。しからば初期に於ける觀音に対する信仰は全く否定されるものであらうか。

否、たとえ觀音が意識されなくても、その性質が充分に理解されていなくても、そこに立派な觀音像が多く作られている事実、又法華經の講經、注疏が特別に觀音菩薩に留意せられておらなくても、觀音普門品も共に講經注疏が行われている以上、人々の間に漸次觀音菩薩の性格が理解されつつあり、又造像の度毎にその性質を把握して行くものであると云い得るのではない。この事が首肯されるならばここに我國の觀音の對する信仰の萌芽を見出す事が出来るのである。

### 三

こうした觀音に対する信仰の萌芽は天平時代に入ると可成り明瞭にその姿を現わして來たの

である。先ず正倉院文書から窺い知れる写経の面から之を考察するに、正倉院文書には数多くの經典が書写されている事を伝えてゐるが、その中特に法華經が最も多く、一二、三八四卷の多きに達しており、以下大般若經、華嚴經、壽量品、金剛般若經、般若心經、觀音經、千手千眼陀羅尼と続き、法華經普門品を獨立せしめた觀音經も二、三〇〇卷を数えている。こうした数の上から見た場合、法華經が最も多く、又觀音經も非常に多いと云う事實は、法華經が現世利益を説くものであるから、当代の現実主義的な時代思潮と一致したものであると考えられ、又之即ち觀音の理解による觀音に対する信仰の一面を物語っているものである。その写経の意図がどの様なものであつたかは、勿論写経の本質が、印刷術の發達を見なかつた當時にあつて、經典の護持と云う事にあるにせよ、各階級の生活態度、或は宗教的背景のもとにそれぞれ意図を持つていたに違ひない。その間の事情はその經典與書拔語によつて知る事が出来る。現存の觀音思想經典古写経跋文の場合

「天平六年歲存甲戌如写、写経司治部卿從四位上門部王」  
の記ある觀世音菩薩受記經の與書跋文によれば

「朕以萬機之暇、披覽典籍、全身延命、安民存業者、經史之中、釈教最上、由是仰憑三宝歸依一乘 敬写一切經 卷軸已訖 読之者 以至誠心 上為國家 下及生類 乞索百年 祈禱萬福 聞之者無量劫間 不墮惡趣 遠離此網 俱登彼岸」

とあつて、写経によつて上は國家、下は全ての生類の幸福繁榮を祈り、又此土を離れ彼岸に達する事を示している。又天平勝宝四年の妙法蓮華經卷八の写経後跋には

「天平勝宝四年歲次壬辰孟秋七月廿二日丙寅之夜為除桑原忌寸比良人之病 館内諸人大發願



奉寫法華經八卷」

とあり、之は明らかに疾病平癒の為に法華經を書写している。この二例のみでは信仰の性格を把握するには充分ではないが、（他にあつても書写年月のみ挙げている關係でそれ等から性格を取り出す事は不可能である。）前者は勅旨經として國家の手で、國家の爲、後者が個人的な疾病平癒の爲であつた事は、觀音に対する信仰が巾の広い且層の深い現世利益的なものであつた事が窺われ、正倉院文書に示す觀音思想經典の写經の數の多い事と考え合せる時一応限られた階級の間にだけではあるが觀音信仰が行われていた事が想像されるのである。

こうした現世利益的な信仰の現れは、國家の宗教意識としても現われている。即ち「統記」神龜五年八月の条に

「勅皇太子寢病經日不愈自非三宝威力何能解脫患苦因茲敬造觀世音菩薩像一百七十七軀并經一百七十七卷礼仏転經一日行道緣此功德欲得平復」

と皇太子の病の一日も早く平癒せんが為に觀音像百七十七軀、觀音經百七十七卷を造写しており、又、天平十二年九月の条に、広嗣の乱を討治せんが為に

「勅四畿内七道諸国曰比來緣筑紫境有不軌之臣命軍討伐願依聖祐欲安百姓故今国別造觀音菩薩像一軀高七尺并写觀世音經一十卷」

とある如く、国別に觀音像、及び觀音經十卷をそれぞれ造り書写せしめている。こうした事実から推しても觀音菩薩を信仰する事は、疾病平癒、國家安穩等現世利益をその目的としていることがうかがわれる。其他天平十三年の各国に国分寺、国分尼寺を建て、丈六の仏像を造り金光明最勝王經と共に法華經各十部を書写せしめた事や、聖武天皇の為に法華經一千部を書写し

ている事等はこうした事を推察せしめるものである。

又かくの如き写経或は造像という形で、表面に現われたものの他に、内面的な希求、願望、或は奇瑞も見出す事が出来る。即ち家伝上に

「至秋七月、天皇御体不念、於是大臣中心危懼、祈禱神祇、亦依三宝、敦求眉寿、壁像申臂而摩頂 觀音寄夢以現空 聖応有所煥然明矣」

とあり又

「加以出家帰仏 必有法具 故賜純金香炉、持此香炉、如汝誓願 從觀音菩薩之後 到兜率陀天之上 日日夜夜 聽彌勒之妙説 朝朝暮暮 轉真如之法輪」

とある如く、家伝の作者藤原仲麿は、彼の祖先である鎌足の伝記の中で、当時の斉明帝の病に對し、神に祈禱し又三宝を敬つて病の平癒を祈り、夢に觀音が現われたと云う奇瑞を表わした事を記し、又後者が現実的な彌勒信仰を表わしていると共に、觀音の導きによつて兜率天に到ると云う事は、敦煌の引路觀音の影響を受けているものと思われるのである。其他南天竺波羅門僧正碑并序にも

「臨終告諸弟子云、吾常觀清性 直嚴自性身 而猶尊重彌陀 景仰觀音 汝曹宜吾帑藏衣物 奉造阿彌陀淨土 又云吾生存之日 普為四恩 奉造如意輪菩薩像」

と記し、又、唐大和上東征伝にも

「去岸漸遠 風急波峻 水黑如墨 沸浪一透 如上高山 怒濤再至 似入深谷 人皆荒醉 但叫觀音」

とあるを見ても、こうした人々にも觀音像が四恩の為に作られ、又彌陀と共に觀音が信仰され

更に航海の途上の風雨に「但叫観音」の言葉から察せられる如く、思わず観音に救いを求める姿、こうした姿が既に中国の法頭にも見られるとしても、斯の如き記事を書かしたその事は当時の観音に関する性格が深く意識され且その信仰が普遍的なものとなつて来た事を如実に示すものではなからうか。

#### 四

以上、仏教伝来以後、奈良時代を通じて観音信仰が形成されて行く過程を、造像、写経及びその經典奥書、跋文そしてその他資料から眺めて来たのであるが、ここで一応要約するならば、仏教伝来以降、飛鳥時代に於ては未だ独立した観音に対する信仰と云うものは見られないのであり、白鳳時代になると可成り多くの観音像が作製されて一見観音に対する信仰があるかの如き感を受けるのであるが、それ等造像の意図を見る時、他の諸仏の造像意図と全く同一範疇に属するものである事が知られ、観音独自の性格をうち出したものではなく、ここにも観音信仰として纏つたものを見る事は出来ない。しかしそうした反面聖德太子の「法華経義疏」の作製は観音信仰の形成に関し重大な意味を含んでいると思う。天平時代になると既に述べた如く、天平写経中、観音を説く法華経が最も多くを数え、その写経の意図にも現世利益的な色彩を濃厚に持ち、又、政治上、或は生活の上に観音の力を借り利益を得ようとする事が強くうち出されて来たのである。この事は、観音菩薩が現世に於てあらゆる人々を救済し、あらゆる苦しみを除くと云う性質を人々が理解し把握した事を意味するものである。ここに観音に対する信仰が一つの纏つたものとして特異な性格をあらわすに至つたのであり、それが後世巡礼、或は補陀落信仰へと展開して行くのである。

こうした事を内面的に見るならば、当時の時代思潮がどこまでも現世と云う立場に立つて、過去を思い未来を思う事であつた事から、そこに現世利益を説く観音菩薩の性格が自覺され且理解されて行く事によつて時代思潮と一致し、観音信仰の形成発展を促したと考えられるのである。それが天平以後である事は、それ以前の信仰が仏教自体まだ日本人の間に吸収消化されておらない間のものであり、諸仏に対する意識が混同されていた事によるのであらう。又ここに初期仏教のもつ限界があると思うのである。

(尚紙数の関係で参考とする註は全部省略した事を御了承願ひ度い)

(研究室 助手)